

四面は巍峨たる山嶽を以て圍まれ仰げば天の一部を見るのみ。冷風の颯々たるもの、谿流の潺々たるもの有るの外は何等耳にする所なし。地は是れ萬里の異域、而も世界の高峯崑崙山中に在り、隨行の人亦其種を異にす。恃むは唯一の馬匹なるが、此れすら尙ほ恃むべくして恃むに足らず。此の如き狀況に處し、馬糞を焚て食を取る、宛然敗軍の將、四面楚歌を聞くが如く、彼を思ひ此を思へば感慨實に無量なるもの有り。

七 崑崙の第二次嶺エンギを越ゆ

二十五日、氣温は日出前三十四度、午後一、二時の交は六十度を示せり。午前七時發、十時四十分エンギ達坂に掛り、午後三時無事克蘭ウルテに着す。此處はエンギ嶺よりする南下水と、喀喇崑崙嶺より西流する葉爾羌河の相合する地點に當る。エンギ嶺は昇降坂共に急峻なるも、南路は北路に比すれば稍々緩なりとす。路は岩石道變じて礫石道と爲り、山は千枚岩、礫岩及石灰岩を以て組織せられ、其の南谷には、昨年來の大氷塊尙ほ残りて厚さ六尺に餘れり。嶺の前後更に草木なく克蘭ウルテに到り始めて少許の灌木を見しが、牧草は全く缺乏す。是日行程約十里。

克蘭ウルテ
絶ゆる
牧草